

学位論文審査の要旨

		要 旨
学位申請者	船戸 はるな 【比較社会文化学専攻 平成20年度生】	<p>本研究では、日本語を外国語として学ぶ（JFL）学習者の日本語指導への示唆を得ることを目的に、情報の伝達に関わる言語表現が多く使用される文字チャットを対象に、JFL環境で日本語を学ぶ学習者の、情報を伝達する際の言語行動、情報を受け取る際の言語行動の双方の観点から分析を行った。情報を伝達する際の言語行動の分析においては、終助詞「ね」及び直接形／間接形に着目し、情報を受け取る際の言語行動の分析においては、相づちに着目した。</p> <p>その結果、終助詞「ね」に関しては、学習者は母語話者に比べ「ね」の使用頻度がかかなり低いこと、そして、任意の「ね」が多く必須の「ね」の非用が多い、ということが明らかになった。さらに、学習者は情報が話し手のなわ張りのみに属する場合（領域A）に「ね」と「よ」の使い分けが困難であることが明らかになった。また、母語話者との文字チャット継続後も、領域Aにおける「ね」と「よ」の使い分けには改善は見られなかった。</p> <p>直接形／間接形に関しては、学習者は間接形の誤用が少ない一方、直接形の誤用は多く見られた。しかし、母語話者との文字チャット継続後は、学習者の直接形の誤用は大幅に減少し、また、直接形と間接形のいずれも使用できる場合に間接形を使用する頻度が高くなったことが確認された。</p> <p>相づちに関しては、学習者は母語話者に比べ相づちの頻度が少なく、加えて相づちを単独で使用する事が多く、「意見・感想」を表わす相づちの使用は少なかった。それが母語話者とのチャット継続後は、相づちの使用頻度は増加した。また、相づちの単独使用の減少、「意見・感想」を表す相づちの増加が見られた。</p> <p>第一回審査会では、母語話者との文字チャットを継続することによって、終助詞「ね」、直接／間接形、相づちのいずれも、その使用が母語話者の特徴に近づく変化をしたことが本研究で示され、JFL環境で学ぶ日本語学習者にとっての学習ツールとしての文字チャットの有効性を検証した点が高く評価された。しかし、統計分析の改善についての指摘がなされ、申請者は指摘された箇所について再分析を行った。第二回審査会ではこれらについて適切に修正が行われていることが確認された。</p> <p>最終試験を兼ね公开发表会においては、明快かつ分かりやすい発表がなされた。また、参加者や審査委員からの質問にも真摯な姿勢で的確に回答した。以上から最終試験に合格し、博士（人文科学：Ph.D. in Applied Linguistics）として認定するに値すると判断された。</p>
論文題目	継続的な文字チャットによる日本語学習者の情報の伝達に関わる言語表現の変化	
審査委員	(主査) 教授 佐々木 泰子	
	教授 森山 新	
	教授 高崎 みどり	
	教授 加賀美 常美代	
インターネット公表	<p>○ 学位論文の全文公表の可否（<input checked="" type="radio"/>可・否）</p> <p>○ 「否」の場合の理由</p> <p style="margin-left: 20px;">ア. 当該論文に立体形状による表現を含む</p> <p style="margin-left: 20px;">イ. 著作権や個人情報に係る制約がある</p> <p style="margin-left: 20px;">ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている</p> <p style="margin-left: 20px;">エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている</p> <p style="margin-left: 20px;">オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている</p> <p>※ 本学学位規則第24条第4項に基づく学位論文全文のインターネット公表について</p>	